

特に藤内式期の顔面把手2個が概出されており該期の濃密な集落の存在が予想されたが、一軒の検出にとどまり集落内からははずれてしまった。しかし、北西区への住居址群の広がりは充分考えられることである。また、井戸尻II式期の住居址群も南西への広がりを予想させられる。

第55図のスクリーントーン貼付の住居址は、唐草文系II式期の住居群である。図でもはっきりしているが、住居址は東北西に弧をえがくようにJ8号、J10号、J15号、J13号と4軒が並び、南側にもJ10号、J15号住と向きあうように、1~2軒が存在し、中央に馬蹄形の広場を有す南東側の一集落が想定される。そして、馬蹄形広場を中心としてその生活が展開されたことを物語るように、埋甕の埋設位置から各住居址の出入口部の方向が馬蹄形広場の側である東壁側に集中し、統一されているということである。

さらに、J9号住居址が北西に存在することから、北西側の一集落が考えられる。中部高地の縄文中期の集落は、曾利遺跡や与助尾根遺跡においてその形態が明らかのように、必ず2つの集落が隣接している。そこから共存し合う他の集落との対応関係がおのずと読みとれるのである。そして、本遺跡の唐草文系II式期の集落もまたそうした形態が充分に予想される。藤内式期の縄文中期文化の確立期にみられる大形住居址が、唐草文系II式期にそのまま顕現していることも注目される。それは藤内期と同様な豊かな生産・生活形態の表われであろう。

曾利III式・IV式期のJ17号・J18号住居址が互いに重複し、台地縁辺部に位置している。住居の規模も小さくなり、あれほど栄えた唐草文系文化がこの期に入るとぶつかりと影をひそめて、八ヶ岳南麓の曾利式文化へと再度移行しているのである。

以上簡単に集落の移り変わりを述べた。本遺跡は縄文前期初頭から中期後半まで連続して集落が延々と営まれ、さらに概出遺物にみられるように晩期へと継続する。

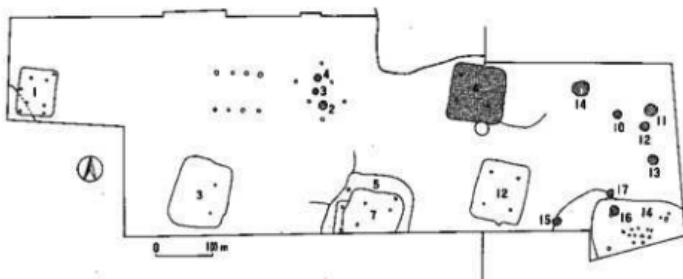
2) 弥生時代

第56図は弥生時代後期・平安時代の住居群と土塁分布図である。

弥生時代の住居址は6軒検出された。その配列は調査区の南端に集中しており、集落は段丘上の南側縁辺部へ拡がる様相を呈する。

南端に確認された、Y5号、Y7号、Y14号は完據することができなかつたため、Y1号、Y3号、Y12号の3住居址が完全に調査されたのみで、集落についての分析は不可能といわざるをえない。そこで、二、三の感想を述べるにとどめたい。

縄文時代中期の住居址と重複するのは、Y1号、Y14号の2住居址である。また、Y5号は同時代のY7号に切られる。出土遺物からみて、Y5号とY7号の時間的差はあまり認められない。座光寺原式末期にY5号が存在したとしたならば、中島式期にY5号を切ってY7号が建替されたとみることもできるし、中島式前半にY5号が建られ、後半にY7号住が立替されたと判断することもできる。いずれにしても少量の座光寺原式、中島式の特徴を兼ねそなえた出



第56図 弥生時代後期・平安時代の住居群と土塁分布図 (1:500)

土器と、Y5号の大形住居址の中にすっぽりとY7号が入り、床面の差が10cm以内で同様な土器片の出土では混沌としていてその判別は困難であった。しかし、他の遺構はすべて同時に存在したとみて良いであろう。Y1号、Y3号、大形のY5号、Y12号、大形のY14号が同時に配列し、南側縁辺部へとさらに数軒の住居が配列して一集落を形成していたものと考えられる。

また、概出遺物、拓影に図示したように、弥生中期のコの字重ね文や水神平系の貝殻条痕文の土器片の出土があり、中期の集落が存在していたことも事実である。

3) 平安時代

平安時代の住居址はH4号の1軒であった。また、平安時代とおもわれる土塁が11基、その他掘建柱の建物址とおもわれる配列ビット2基、ビット群等が検出された。

H4号住居址は、床面より出土した灰釉陶器によって10世紀半と時期決定し、土塁群は確認面のレベルおよび出土した古銭により11世紀初頭に位置付けした。したがって段丘上縁辺部に土塁墓群を埋置し、住居址群はそれより北西区へ拡がるものとおもわれる。付近に所在する果樹園および畑等から、須恵器壊、土師器の内面黒色壊、墨書き土器等が概出されていることからしても、莊園に組みこまれたかなり大きな集落が存在したことが想定される。

また、配列ビットはビットの規模が小さいことから簡単な掘建柱の建物址であったとおもわれる。

以上簡単に、集落について述べたが、上の林遺跡は現在までの調査および概出遺物から、縄文前期初頭から中期、晚期、弥生中期、後期、平安時代へと延々と続いた複合集落遺跡である。今回の調査によって、縄文前期の新たな資料が加わった。

(島田 恵子)

第3節 遺 物

第1次、第2次の調査を通してかなりの量の遺物が出土している。詳細は各遺構別に説明してあるので、ここでは特殊な遺物を中心に成果と問題点を主にまとめてみたい。

1) 繩文前期の遺物

出土遺物の中で最も古いものは、前期初頭の木島式に比定される土器片2点の出土である。器内のうすいおせんべい土器に、同じようにうすい粘土紐をおしつぶした状態で貼付けた隆帯で器面を飾りその上に貝殻条痕文が施されている。同類の土器が伊那市の伊勢並遺跡・飯島町カゴ田遺跡から出土している。初頭から末期まで空白があり、末期は日向式（諸磯C式）、竈烟式（十三菩提式）の土器片が調査区全面に散見するが、該期の遺構は土塙のみの検出であった。D18号土塙からは下島式土器の影響をうけた、口唇部の粘土紐貼付による装飾が施された竈烟I式の深鉢が出土している。胴下部～底部を欠損するが貴重な資料である。煤とお焦げが顕著で墓塙への転用であるとおもわれる。

また、関西系の土器片がD7号土塙およびグリッドから出土している。岡山県里木貝塚出土の船元I式（鷹島式）に酷似する。同類の土器片が大原第1、第2遺跡、筍輪中学校敷地内、澄心寺下遺跡からも出土している。岡山県では船元I式として中期初頭に位置付けられているが、県下においては繩文前期末の土器片と判出することが多い。本遺跡でも竈煙II式土器片と共に判出したことから、その時期的位置付けは前期末とした。グリッドからの出土も、日向式竈煙式土器と混在していた。該期からすでに関西との交通が活発におこなわれていたことの実証であろう。

2) 繩文中期初頭～中葉の遺物

中期初頭の遺物で先ず上げられるのは、九兵衛尾根式土器である。細片は竈煙式土器片と共に調査区全面に散布していたが、J15号住居址の東壁上面に横転していた完形品が偶然発見された。そして、J18号住居址の貯蔵穴状ビットの一つが竈煙式～九兵衛尾根式期の住居址のもので、床面も調査区外へ延長していることが確認されたが、調査することは出来なかった。このことからも付近に住居群が存在するものと考えられる。また、この住居址と重複して、調査区の東北端より猪沢式の住居址が検出され、底部を欠損する埋甕が出土した。さらにミニチュア有孔鉗付土器、土偶の脚部が出土している。土偶脚部は整理作業の段階で発見した。おそらく覆土内の出土であるとおもわれる。有孔鉗付土器はミニチュアではあるが本遺跡で出土した唯一のものである。

藤内式期は、概出遺物に人面把手の優品が2個あり、こうした把手は普通一集落内に1個出土するのが不編的であるようだが、2個の出土はかなり大規模な集落が予想されたのであった。出土遺物は、埋甕に埋設されていた大深鉢と内面に朱の生漆を塗布した浅鉢が出土したのみである。住居址も大形化し、比例して出土土器も大形である。

調査区最西端コーナーにかろうじてその住居址が検出されたのは、井戸尻II式期である。出土土器も破片のみであったが、この期に多くなる台付甕破片、口唇部に蛇体が突起している破片、みみずく把手片などの出土がみられた。

3) 唐草文系II式土器

唐草文系II式の土器は、6軒の住居址からそれぞれ出土し、なかでも埋甕として埋設されたものは10個体を数える。

J 8号住居址からは、出入口部に4個体の大埋甕が埋設されていた。その内1個体は胴部のみで細片となり復原不可能となってしまった。入口部左右に2個対すつ対になって連なるよう埋設されていた。他に頸部に弱いくびれを持ち煤とお焦げの顯著な煮炊用中形甕形土器が3個体、大形甕形土器1個体、双把手付深鉢1個体が出土している。さらにミニチュア土器2点、土偶顔面が北東壁コーナーから50cm内側の覆土下部よりそれぞれ出土し、貯蔵穴内より大形土偶の胸部片が出土している。覆土中より小形土笛片、耳飾り片、双把手片4点等の出土があり、華やかな唐草文系文化を感じられる。

樽形状の大埋甕は、J 9号住居址から石蓋を共なって出土した。器高57cm、口径40.5cm、底径13cmを測る最大級である。他に煤、おこげ痕の顯著な煮炊用土器の中形深鉢2個体と2つの孔を有すミニチュア土器が出土している。

つづいてJ 10号住居址からは、やはり埋甕が4個体出土している。そのうち一個体は口縁部のみの埋設で北東コーナー寄りに離れて設置されていた。3個体は東側の出入口部に並んで埋め込まれており、口縁から胴上部を欠損する大形埋甕は、剣先文が施された唯一の文様構成である。他の2個体は煤とお焦痕が顯著な中形煮炊用土器の埋甕への転用である。さらに、器肉がうすく底部が6角形を有し、器高が8cmになるとおもわれる浅鉢形土器の底部片が出土した。例をみない器形である。

J 13号住居址からは、両耳壺の完形品、樽形状の大甕片が出土している。その他、平板状土偶胸片等が覆土内より出土している。

J 15号住居址からは、埋甕、伏甕、双把手付の大形広口壺片が出土している。該期の埋甕はどれも唐草文様で構成されているが、この住居址に限り磨消繩文を施した甕形土器が埋設されていた。こうした例は同文化グループに属する桶口内城遺跡30号、66号住居址にみられる。両住居址の埋甕も磨消繩文系の文様構成である。炉内から出土した大形広口壺の把手には朱の漆が塗布されている。出土地からして祭祀的な要素がうかがえる。次に伏甕であるが、文様は、口縁部の勾玉状刺突文、綫杉文から変化した雨垂状沈線文によって文様構成が施され該期の時期からはずれる。このことは、伏甕の用途を考えた場合、他の時期に廃絶された本住居址が埋葬に利用されたものと考えられる。それは、拓影図に示した床面直上の土器片はすべて唐草文系II式文化の代表たる文様構成で占められていたからにはかならない。

J 17号住居址は、柱穴際の床面より曾利IV式期の土器片が出土したのみであった。また、J 18号住居址は、炉際より2個体のキャリバー形深鉢が出土した。曾利III式の代表たる器形であり、地文には縄文が施され、ところどころに磨消縄文が配されている。その他、唐草文系IIの把手部片が1点出土しているが、長石、石英を多量に混入し磨滅が著しい。

4) 唐草文系II・IIIの編年について

本調査では、集落の中心部にメスを入れることのできた時期は、なんといっても唐草文系II式期にあるといえよう。その結果、上伊那郡の唐草文系土器の編年に一つの特徴と方向が見出されたことである。

1979年、長崎元広氏を中心とする中部高地縄文土器集成グループによって、諏訪湖盆・松本平・千曲川水系を中心とした唐草文系土器群の編年試案が提示され、現時点においては唐草文系は、中期後半において4段階に推移しているととらえ、編年順に唐草文系I・II・III・IVと仮称をした。

本調査の整理の段階では、この編年に添って整理を試みたのであったが、すぐに矛盾が生じてきたのである。各住居址内出土土器の中で、明らかに同時使用されたとおもえるもの、同レベルで出土地点がほとんど離れていないもの等をはじめとして、各住居址の土器はII・IIIにまたがって混在するという現象が起ってしまった。住居の建替によって、2時期にまたがって一住居址内に住んだためかということも考えられたが、その様相等から不自然であって、この考えもあてはまらない。そういう内に、J 17号、J 18号住居址の整理に入った時、一つの解決が生み出されたのであった。重複するこの二つの住居址は、曾利III・曾利IV式期に比定される。唐草文系IIIに併行する時期である。当然埋甕を中心とした唐草文系土器群の出土があるはずである。ところが覆土中はもとより、生活面に至っても微量の出土で、覆土中より10点程度の細片が出土したのみで、J 17号は生活面からの出土は皆無であり、J 18号は、摩滅の著しい把手の出土だけであった。そして、炉際より曾利III式そのもののキャリバー形深鉢がほぼ完形品で2個体出土している。このことは、唐草文系IIIとの併行関係は先ずないとみてよいであろう。埋甕の埋設もなく、住居址も小形化し、遺物の出土も著しく減少する。J 8号、J 10号、J 15号住居址の遺物の出土は大量で、その破片のほとんどは唐草文系であったことからみても、本遺跡の唐草文系土器はII・IIIと2区分は不可能であろう。IIの1期区分とされねばならない。このことは、同一文化グループに属する樋口内城遺跡の2、4、10、12、28、30、47、48、62、64、66、67、70、73、74、81、92、107、131、133、134、138、141号住居址出土の土器群からも同様なことがいえるであろう。上伊那郡のこの2遺跡についての詳細な分析は改めて稿をおこしたいと考えている。その他、原垣外遺跡の唐草文系の土器についても同じことがいえる。

また、J 15号住居址出土の伏甕は、唐草文系IVに比定される勾玉状刺突文、綾杉文から変化

した雨垂状沈線文によって文様構成が配されている。このようにⅡ、Ⅲに継続する資料も見出されていることから、初現である唐草文系Ⅰの土器と共に上伊那郡の唐草文系土器の編年を明らかにする上で今後の課題として、さらに多くの発掘調査資料をもって検討を加えていかなければならぬであろう。

5) 弥生時代の遺物

弥生時代の出土遺物で先ずあげられるのは、遺構検出作業時にグリッドから出土した、水神平系の貝殻条痕文土器片であろう。中期初頭に位置付けられる。中期後葉の土器は概出遺物で図示した、小形台付甕の「コ」の字重ね文土器がある。今回の調査では後期後半の住居址が6軒検出されたが、遺物の出土は極めて少ない。埋甕炉に埋設されていた甕、壺の他は、底部、口縁部片のみである。したがってここでは、土器の特徴を二、三あげてまとめとしたい。

文様構成は、廉状文と波状文の組み合せ、廉状文と横描きU文との組み合せ、また拓影に多くみられる体部上半に描かれる、短線文、四分の一円弧文、口縁部段上に沈線を縱に描く等の文様構成は、天竜川中流域の座光寺原式土器および中島式土器の影響そのものであるといえよう。しかし、横描波状文は回転台を使用していないものが多いようである。断絶が多く、途中で切れたり、一回転する間に最初の文様出発点と大きくズレてしまっているものが多くみられる。

器形の面では、特に底部片の出土が多かったY3号住居址では、明らかに天竜川中流域の影響そのものであるといわれている壺と甕の識別が、胎土の精選による硬く焼きしめた状態によって、容易に判別されるということがあげられる。しかし、中には稀なものもある。また、甕と壺は底部がややくびれて立ち上っている。これは座光寺原式、中島式に特に顕著である。完形土器の出土が少なかったため、天竜川流域と千曲川流域の文化が共存するであろう地理的条件等から、その特徴をつかめなかつたことは残念である。

また、弥生時代の出土遺物で特筆すべきものに、第39図に示した織布状圧痕のある土器底部があげられる。織文時代の編網痕とは大きく異なり、細い糸で織られた感を呈する圧痕である。弥生時代の網は、福岡県飯塚市立岩遺跡、春日市門田遺跡、須玖岡本遺跡で断片となって検出されており、これ等を詳細に研究した、布目順郎氏は船載品ではなく北九州で養蚕された材料を使っている可能性の強いことを指摘している。それはすでに盛んであった植物繊維の織り方と同様に仕上げているので、同時代の中国の紡織物にくらべて織り方が極端に粗いことから推定されている。^(註1)

本遺跡からは、3点の出土があった。織り方は平織りであるが糸の種類はわからない。植物繊維である可能性の方が濃いとおもわれる。しかし、すでに機織りの技術が伝わって普及して^(註2)いたことがわかる。糸の太さは非常に細く0.03mm以内であり、その高度な技術がうかがえよう。

また、織物と関連した第59図6の紡錘車は弥生の住居址群の配列するY1号とY3号住居址の間から表採したものである。かなり大形である。『弥生時代の紡錘車を全国的に調査した結果によると、近畿地方だけは、他の地域にくらべ重量が軽い』という結果が得られている。この理由については、臆測ではあるが、先進的な幾内には比較的重量の軽い草皮系の繊維がつかわれ、その他の地域ではまだ樹皮系の繊維が利用されていたため、地域差となってあらわされたのではないだろうか』と民俗学者柳田国男は「木綿以前の事」の中で記しておられる。このことから判断して、出土した紡錘車は、かなり太い糸を紡ぎ、底部圧痕の織り布は小形の紡錘車を利用したものと考えられる。また、Y12号、Y14号住居址からは小形の土製円板が出土している。孔の無いものであるが紡錘具として役立つことが武蔵雄六氏の実験で明確にされており、井戸(註3)尻考古館に展示されている。こうしてみると、大小の紡錘車の出土から、本遺跡の弥生集落の中では高度な技術のもとに底部圧痕にあるすぐれた織物が日常生活の中に浸透していたのであろう。

(島田 恵子)

註1 森 浩一 「日本の生活の芽生え」 図説日本文化の歴史1 1979年

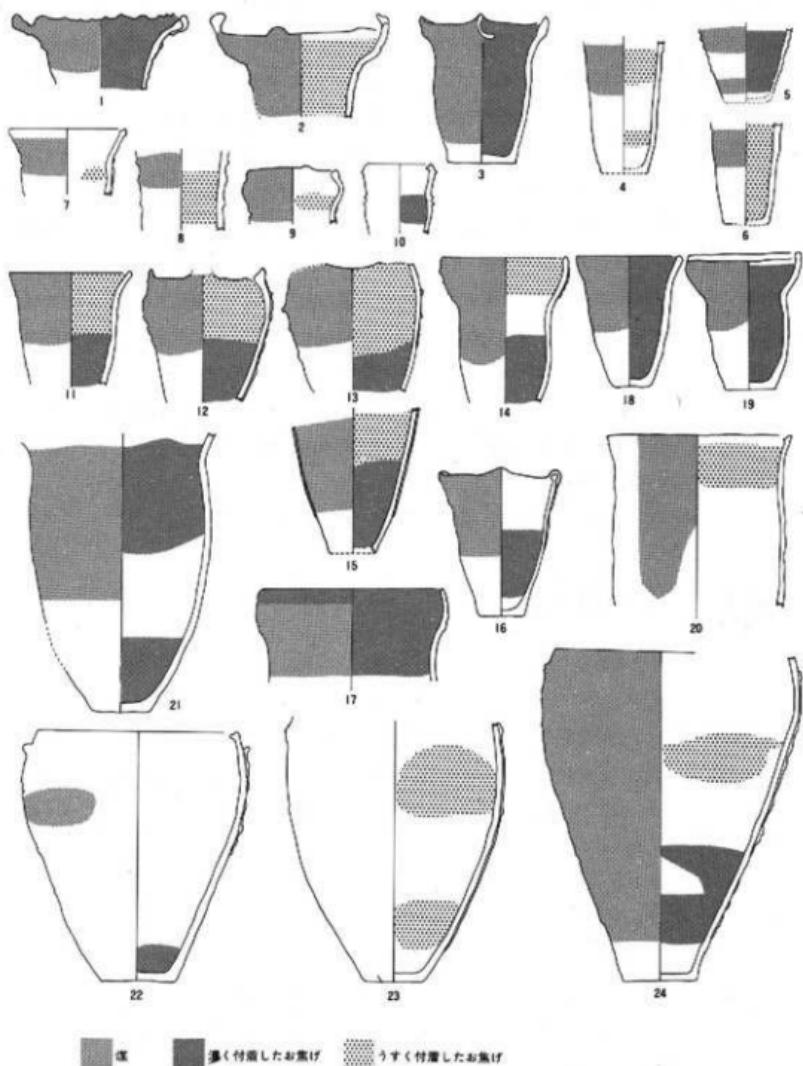
註2 竹入洋子氏の実験による。

註3 長崎元広 「縄文の紡錘車」 山麓考古八号 1977年

第4節 煮炊用土器

第57図にあげた土器群は、外壁に付着している煤と、内壁にこびり付いているお焦げ痕の頗著なものをとりあげた。

先ず煤の付着は、小林公明氏が「曾利」の報文『煤とお焦げ』で指摘した如く、器体の上半部にみられる。また、お焦げは下半部～底部にかけてベッタリ付着し、口縁部付近はうっすらと認められる、11、12、13、14、15があり、口縁付近および口縁外壁にまで煮こぼれてベッタリ付着している、1、3、17、18、19などもある。また、筒形状の4、5、6、8、10は比較的うすくて焦付きがようやく認められる程度である。樽形大甕22、23、24と大甕21は埋甕として埋設されていたもので、煤の付着が頗著なものは21、24の2個体で、22はほんの一部分であり23は全く認められない。その反面黒漆の塗布が一部分に認められる。これは土器焼成時に熱のまわり方で付く黒斑とは異なり容易に見分けがつく。22と同じJ8号住居址から出土し、煤とお焦げの全く認められなかった第25図6の埋甕も、外壁が黒漆で広範囲に塗布されていた。お焦げは21の大甕がうっすらと上半部および底部付近に認められ、大甕の中では一番頗著である。22は、底部にベッタリ付着している他は内壁はあまり使用されていない様相を呈する。23は上半部と底部付近にうっすらと認められる。24は、下半部のほんの一部分にベッタリ付着し、上半部の一部分にもうっすらと認められるが、その他壁はきれいで使用されたとはおもえない。



第57図 上の林遺跡出土土器の様とお焦げ(1:10)

程である。しかし、外壁の煤はこすると手にタールが黒く付いてくる程顯著である。これは、箕輪町から産出する粘土が良質であるため、調整の過程で内壁を丁寧に磨いたならば、お焦げがつきにくくなることも考慮されねばならない。それにしても大甕は用途が限定されていると考えられる。持ち運び等に大変な労力を必要とすることから、日常使用される煮炊用土器とは区別されるだろう。しかし、24の外壁の煤は頻繁に使用されていたことを表し、細く観察すると内壁底部付近のこびり付きは、ヒビ割れた割れ目から煤が入りこんだと思えるような、外壁に付着しているものに類似する。そして、他の面の内壁がきれいであるということから、使用的用途が限定される。それは、穀類、堅果類を熱してこがす『炒る』役割と、食用植物を『茹でる』役割があげられる。炉の大形と炉の中間部に簡単な石囲いをしていることも、大甕の使用と日常使用する中形の煮炊用土器との両者の使用が可能なことを裏付けていると考えられる。

また、同じ埋甕でも、12、13、15の中形甕は、煤の付着はもとより、お焦げ痕や内壁の様相に大きな隔たりがある。どれも下半部はベッタリで上半部はうっすらと付着し、内壁全面にお焦げが付着している。このような中形甕の埋甕と共に、キャリバーワークの深鉢である、11、14、16、17、18、19も使用が頻繁であったことがうかがえ、これ等の土器が日常煮炊用土器であつ

第6表 煮炊用土器一覧表

土器番号	出土遺構	口径	器高	胴部	米炊容量	汁もの容量	食事人員	備考
1	D18号土塙	30	($\frac{20}{25}$)	17	6合	cc 2.400	人 5~7	墓塙へ転用 鎌烟I式
2	J16号住	31	(23)	18.5	6合	2.400	"	埋甕へ転用 猪沢式
3	—	22.5	24.5	17	5合	2.000	4~6	単段出土 九兵衛尾根式II
4	J8号住	21	(25)	16.5	5合	2.000	4~6	床直 唐草文系II
5	J10号住	20	(25)	19.5	7合	2.800	6~8	埋甕へ転用 "
6	J9号住	21	(28)	22.5	7合	2.800	"	床直 "
14	J9号住	21.5	(28)	20	7合	2.800	"	覆土 "
15	J10号住	25	(30)	20	6合	2.400	5~7	埋甕へ転用 "
16	J8号住	21.5	(25.5)	16	4合	1.600	3~5	床直 "
17	J15号住	32	($\frac{30}{35}$)	29	7合	2.800	6~8	" "
18	J18号住	18.5	22.5	14	3合	1.200	2~4	炉窓 曾利III式
19	J18号住	19.5	23.5	14	3合	1.200	"	" "

()内は推測値

たことを物語っているといえよう。以上から、日常煮炊きに使用した土器は、口径18.5~32cm器高20~35cm、胴部14~29cm内の規格のものであったことが推測される。

さらに、これらの土器の煮炊き可能な容量をお米で換算したならば、第6表のようになる。唐草文系II、J8号出土の11は、5合で4~6人、16は4合で3~5人の食事がまかなえる。J9号出土の13、14はともに7合で6~8人、J10号出土の12は7合で6~8人、15は6合で5~7人となる。曾利田式期のJ18号住居址出土の18、19は一回り小形となり2~4人分の煮炊きとなる。また、籠庵I式期の1は6合で5~7人分、猪沢式期の2もやはり5~7人分、九兵衛尾根式期の3は4~6人分と、各時期によって土器の大きさが異なり、また、その時期別により日常煮炊用土器の大きさはほぼ統一されている。このことは、堅穴住居の居住入数にも関係あるものと思われる。こうしたことから、社会構造の一部分を解明していく手がかりを得られたらと考えている。

また、焦げ付き等から判断して、汁のたっぷり入った雑炊、あるいは粥的な調理であったと想定される。この場合、穀類は米6合の炊飯が可能な土器であった場合、約1/3で充分である。でんぶん粉はふくれ上るため、具を入れても汁の中に泳いでいるといった状態とは異なり、たっぷりと汁の中に満たされる状態となる。堅果類、狩猟した動物の肉類、採集植物を取り混せて料理したとしても、一人一日一合を食することになる。採集食用植物と共に澱粉質食糧の栽培耕作は必然的要因であろう。また、堅果類のみでは主食とはなりにくい。

唐草文系IIの土器で特に注目されるのは、J8号住居址、J15号住居址出土の口縁部片拓影図で特に顕著であるが、蓋受部の突起が口唇部～口縁内部にかけて取り付けられていることがある。蓋をするための受口である。唐草文系に限ってこの蓋受口がみられるのは、煮炊きの相手である材料に変化があったためであろうか？こうしたことも今後の課題として追求していくなければならないことである。

(島田 恵子)

第5節 屋内祭祀

住居址内から出土した呪術や信仰に関する遺物および施設等を中心にして、屋内祭祀について考えてみたい。

本調査の中で、呪術に関する特別な資料として、第一に埋甕があげられよう。埋甕の埋設されていた住居址は、猪沢式(J16号)、唐草文系II(J8号、9号、10号、15号)の5軒である。埋甕は、中期後半唐草文系II式期に一般化しているが、中期初頭猪沢式期での埋設は、やはり特別な住居としての意味があろうかと思われる。伴出遺物には有孔鉢付土器のミニチュアおよび毀れた土偶の脚が出土している。調査区外にかかってしまったことと校舎建設基礎工事で破壊されたため、住居は全くのみの検出にとどまってしまい、遺物の出土は微量であったが、そこにこ

れだけの呪術的な遺物が出土したことは幸運であった。そして、埋甕埋設の萌芽がすでに中期初頭に顕現していたことも見のがせない。

唐草文系II式期に入ると埋甕は一住居址内に複数となって多量に埋設されている。特に、J8号、J10号住居址はともに4個の埋設がみられた。J8号住は出入口両脇に2個ずつ対になつており、唐草文系の代表たる器形である樽形の大甕で、その文様構成は4個体それぞれ異なる個性を示し、該期の文化の最高峰が決集されたかのような取り合せである。同時埋設ではなく、出入口に近い側へ先ず左右に一対、その後、前に埋設した甕に寄りかかるように多少傾いて埋められていて、レベル的にも上りぎみであった。さらに、同住居址からは、中央寄りの貯蔵穴内より大形土偶の胸部が出土し、その付近の覆土下部より土偶顔面、ミニチュア土器2個体が出土している。整理作業の過程で土笛、耳飾り片等を発見しており、実に多彩な祭祀具の一式勢ぞろいというところである。

次にJ9号住居址であるが、調査区外にかかっていたため充分な調査ができなかつたが、ここでは本遺跡最大である埋甕が石蓋を共なつて出土した。この大甕は外壁に顯著な煤を全面に付着させている。口縁を一部欠落するのみではほぼ完形である。また、2つの孔を有すミニチュア土器も出土している。

次にJ10号住であるが、該期の住居址の中ではこの10号住だけが小形である。したがつて、3個とび石状に連続して埋設されていた埋甕も中形であった。この3個の埋甕は、日常生活に頻繁に使用されていた煮炊用土器で、煤とお焦げの付着が最も顯著である。埋甕への転用も食生活に關わる日常的な祈りの意味が込められていたことが想定される。こうした、煮炊用土器の埋甕への転用は、中南信地区において一般的である。

また、この住居址からは南東コーナ際より、玉抱三叉文の彫刻が陰刻された石棒が平らな頭(註1)を床面に出した状態で埋られていた。この石棒に関して武藤雄六氏は麦作農耕文化の伝来と共に出現し、伝播経路の各所に出土が認められることを指摘している。また、平出一治氏は、この石棒は富山县に分布の中心をもち、石川、新潟の日本海沿岸地域に広がり、本県への搬入は大町に出土していることから、松本平、伊那谷、あるいは飛驒から伊那谷の路も考えられることを論考している。さらに、この住居址からは他に例のない6角形の底部をもつた、浅鉢片も出土しており、他の住居址とは別の多彩な資料の出土である。

J15号住居址に埋設されていた埋甕は、磨消繩文が施されており、ここだけが唐草文様でなかったことも注目される。この埋甕は、明らかに堅穴住居建設後に埋設されたことが観察されている。そして、堅穴炉壁上からは丸石が、炉際からは自然石利用の石棒が出土している。炉内からは把手に朱の漆を塗布した双把手付広口壺片も出土している。炉と関わりを持った祭祀が顕現していたものとおもわれる。他に土偶の足片が出土している。さらに、この住居址と時期が異なる伏甕が床面上に伏せられていた。唐草文系IV(曾利V式併行)に比定されるもので、

廃絶された本住居址が利用され、埋葬に使われたものであろう。武藤雄六氏は「寝伏り葬説」を打ち出しているが、このことからその可能性は充分考えられる。

最後に、J13号住居址の祭祀施設は、南西コーナから炉際にかけて敷石状に大小の石が敷かれた状態で配石していた。こわれた石皿、割れた石柱等が組みこまれていて、奥壁にかかる位置からしても屋内祭壇を想定させられる。他に平板状土偶の胸部片の出土があった。

概出遺物の中には、小形ではあるが曾利II式期（唐草文系II併行）の釣手土器がみられる。これ等の住居址群の中に特殊な遺物として加わっていたものであろう。

以上のように、唐草文系II式期の各住居址は、埋葬にはじまって祭祀に関わるさまざまな遺物の出土および施設がもうけられている。屋内祭式の発達から確立期に位置付けられる。馬蹄形の広場を中心に各住居址の出入口部が設けられ、埋葬が埋設される。そして、各住居にはそれぞれ個性を持ち、バラエティーに豊んだ祭祀がとり行なわれていたことが、その出土祭具によって暗示される。それは、住居内成員だけの祭祀にとどまらず、いろいろな組み合せによって集落全体の祭式であったことも想定される。馬蹄形広場の果す役割りも、集落内の日常生活はもとより、祭祀生活とも密接につながっていたことであろう。

（島田 恵子）

註1 武藤雄六 「縄文農耕の素描」 山麓考古8 1977

註2 平出一治 「土器埋設石圍炉についての覚書」 山麓考古11 1979

引用参考文献

1. 「中央道報告書——上伊那郡箕輪町」 1973
2. 「」 「——上伊那郡辰野町その2」 1973
3. 「」 「——岡谷市その1・その2」 1974
4. 「」 「——上伊那郡宮田村その2」 1974
5. 「」 「——岡谷市その3」 1975
6. 「」 「——茅野市・原村その1・富士見町その2」 1975
7. 「」 「——原村その4」 1977
8. 「」 「——岡谷市その4」 1978
9. 「」 「——茅野市・原村その3」 1976・1977
10. 「」 「——上伊那郡飯島町内その3・駒ヶ根市内」 1971
11. 青山柴朗・島田恵子他 「前田遺跡」 車札村教育委員会 1980
12. 伊藤正和他 「橘原遺跡」 岡谷市教育委員会 1981
13. 今村善興 「飯田市座光寺原遺跡」 長野県考古学会誌4 1967
14. 糸飼幸雄 「平出第三類A土器の編年的位置付けとその社会的背景」 信濃29-4
15. 桐原 健 「信濃における平安期土塙墓の性格」 信濃28-1
16. 桐原 健 「土偶祭祀私見」 信濃30-4
17. 工柴普通 「弥生土器」 日本原始美術3 1979
18. 小林公明 「石庖丁の収穫技術」 信濃30-1
19. 小林公明 「繩文中期八ヶ岳南麓における農具としての打製石器」 信濃29-4
20. 小林公明 「曾利IIの特大土器」 山麓考古4 1976
21. 児玉幸多他 国説「日本文化の歴史1」 1979
22. 五味一郎 「乳棒状磨製石斧の製作」 山麓考古9号 1978
23. 笹沢 浩 「弥生土器」 一中部・中部高地I— 考古学ジャーナル131 1977
24. 横口昇一 「土器廃棄に関する一問題」 信濃24-12
25. 島田哲男 「唐草文土器の文化」 山麓考古10 1978
26. 島田哲男 「繩文前期末・中期初頭の関西系土器」 山麓考古13 1981
27. 島田恵子 「繩文時代のおんなたち1・2」 山麓考古12・13 1980~81
28. 鈴木道之助 国録「石器の基礎知識III」 1981
29. 末木 健 「伊那谷中部繩文中期後半の土器群とその性格」 信濃30-4
30. 千曲川水系古代文化研究所編 「概年」 1980

31. 戸沢充則他 「日本考古学を学ぶ(2)」 1978
32. 戸沢充則他 「新山遺跡」 東久留米市教育委員会 1981
33. 友野良一他 「丸山南遺跡」 駒ヶ根市教育委員会 1977
34. 友野良一他 「大原第一・第二・第三遺跡」 笠輪町教育委員会 1977・78
35. 友野良一他 「草前」 飯島町教育委員会 1979
36. 友野良一他 「原垣外遺跡」 駒ヶ根市教育委員会 1978
37. 友野良一他 「カゴ田」 飯島町教育委員会 1978
38. 中島豊晴他 「中島遺跡」 塩尻市教育委員会 1980
39. 永峰光一他 「縄文土器大成」 第2巻中期 1980
40. 永峰光一他 「明寺・茶臼山遺跡」 车礼村教育委員会 1980
41. 長崎元広 「曾利遺跡における集落の復元」 「曾利」 富士見町教育委員会 1978
42. 長崎元広 「石棒祭祀と集団構成」 ドルメン8 1976
43. 長崎元広 「中部地方の縄文時代集落」 考古学研究 23-4 1977
44. 長崎元広 「縄文の紡錘車」 山麓考古8号 1977
45. 長崎元広他 「中部高地縄文土器集成」 第1集 中部高地縄文土器集成グループ 1979
46. 長崎元広他 「山梨・長野における縄文中期後半の」 " " 1980
曾利式土器編年
48. 林 茂樹他 「木下北城遺跡」 笠輪町教育委員会 1977
49. 林 茂樹他 「御射山遺跡」 笠輪町教育委員会 1978
50. 林 茂樹他 「澄心寺下遺跡」 笠輪町教育委員会 1979
51. 林 茂樹他 「上伊那郡の考古学的調査」 総括編 1971
52. 平出一治 「土器埋設石圓炉についての覚書」 山麓考古11 1979
53. 宮沢恒之 「飯田市中島遺跡」 長野県考古学会誌 1967、4
54. 宮沢恒之 「赤坂・鐘銅原B・無縁堂・新井遺跡他」 高森町教育委員会 1979
55. 水野正好 「集落」 考古学ジャーナル 100 1974
56. 水野正好 「埋葬祭式の復原」 信濃 30-4
57. 宮坂虎次他 「与助尾根南遺跡」 茅野市教育委員会 1980
58. 武藤雄六・小林公明他 「曾利」 富士見町教育委員会 1978
59. 武藤雄六 「長野県富士見町築畑遺跡の調査」 考古学集刊 第4巻第1号
60. 武藤雄六 「横刃型石器の用途について」 山麓考古4号 1976
61. 武藤雄六 「縄文農耕の素描」 山麓考古8号 1977
62. 百瀬長秀 「土製耳飾に関する諸問題」 信濃31-4
63. 反野町郷土美術館編 「信濃の土偶」 1980

第4章 結 語

伊那谷の地形は、天竜川を中心にして、東と西とに広がる広大な河岸段丘と田切地形、そしてこれらの河岸段丘の背後に高くそびえる西の中央アルプス、東の伊那山地・南アルプスの峰々によって象徴される。古代以来、伊那谷の人々の生活の舞台は、天竜川及び三峰川等支流の河岸段丘面と沖積面、大小河川の扇状地面とが中心であったことは、過去の調査によても明らかなところである。天竜川両岸の遺跡立地を考えてみると、中央アルプス・伊那山地の山麓と段丘面とが接する地域、河岸段丘端の湧水地帯に近い地域、段丘面を浸食して流下する中小河川の両岸地域、及び天竜川の自然堤防上に多く分布している。時代・時期によって遺跡立地も複雑に変遷しているが、各時代を通じて最も多く生活の舞台として活用してきたのは、河岸段丘端の湧水地域であった。

箕輪町内においても、今回調査を行なった上の林遺跡をはじめ本城・北城・南城・猿樂などの規模が大きく、長い期間にわたる人々の生活の跡をとどめている多くの遺跡や、上伊那地方で唯一の前方後円墳である松島王墓古墳（長野県史跡）も同じ河岸段丘端（神子柴段丘面）に位置している。

上の林遺跡は、箕輪工業高校敷地を中心に、2～30,000m²におよぶ規模をもつと想定される遺跡で、繩文時代前期・中期・後期・晚期、弥生時代中期・後期、平安時代と長い時期の遺構・遺物が検出されている。今回の第1次・第2次発掘調査は、箕輪工業高校々舍改築にともなうもので、限られた地区的みの調査であり、遺跡の全容は明らかにすることはできなかったが、本文及び考察で記述したごとく、各時期の集落のあり方・住居址の形態の変遷、出土遺物の様相等の一端を知ることができた。なかでも、繩文時代中期後半、特に唐草文系土器の良好な資料が多数検出されたことは注目される。近年、この時期の土器編年研究が中部高地繩文土器集成グループ等によって進められているが、唐草文系土器の一つの中心地と想定されている上伊那地方の研究はあまり進展していないのが実情である。今回の発掘調査で、繩文時代中期後半の住居址が7軒検出され、住居址とともに埋甕を中心に多くの土器が出土したことは、上伊那地方のこの時期の土器編年研究の一つの手がかりとなるものであろう。この点については前章考察において、島田恵子氏が試案を提示している。

人間が集団で生活を継続したところには、生活の場としての集落、生産活動の場としての狩場あるいは耕作地、及び墳墓地域があつたはずである。われわれが遺跡として調査を行なっているのは、集落と墳墓の地が主体であって、生産活動の場はなかなかつかむことはできず、調査する機会にもめぐまれない。伊那谷の広大な河岸段丘をながめていると、狩猟の民、そして

農耕の民へとうつり変っていくなかで、人々の生産活動の場はどこにあったのか、また、どのように広がっていったのか疑問でならない。

限られた期間の中で、しかも、箕輪遺跡と併行しての発掘調査と報告書の作成といったきびしい状況の中で、発掘調査、遺物の実測、図版作成、原稿執筆、遺構・遺物の検討・考察と精力的に作業を行ってくださった島田恵子・山内志賀子・古屋公彦の各氏の労が大であったこと、箕輪町、箕輪町教育委員会、特に箕輪町郷土博物館のみなさま方が、調査に全面的に御協力くださったことをここに記して、厚く御礼申しあげます。

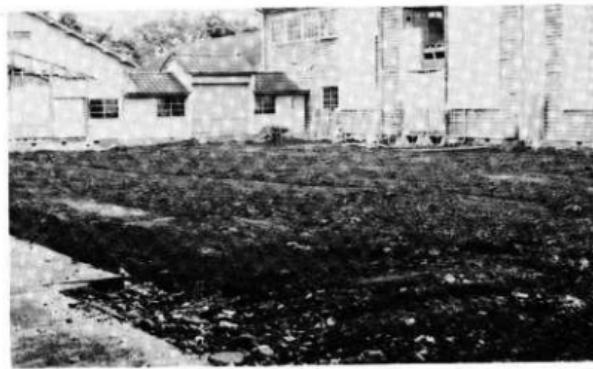
この報告書が今後の調査や遺跡保護に生かされることを期待しています。

(団長 丸山敏一郎)

図 版

(第一次)

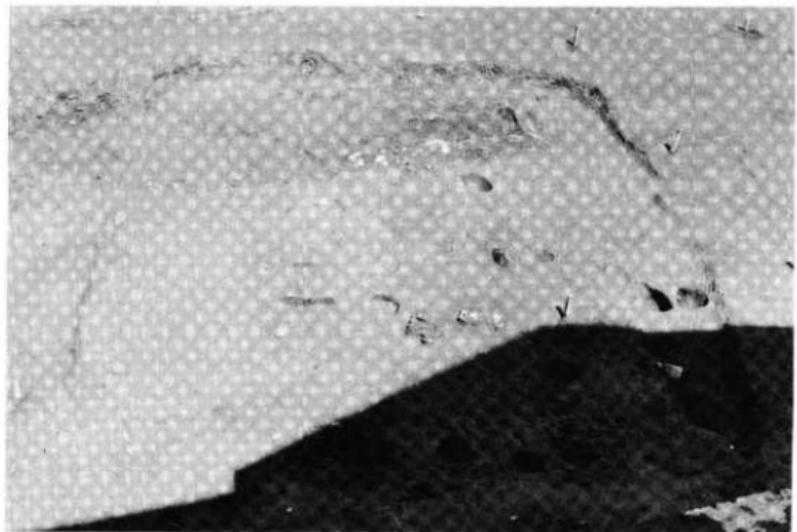
(第二次)



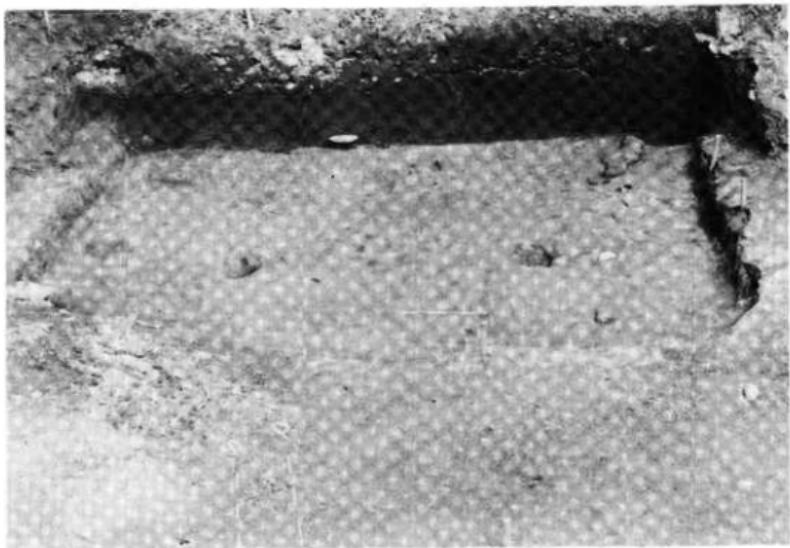
1. 発掘調査区近景
(上段の写真の検査を取り壊して調査を行なった。)



1. Y1号J2号住居址



2. Y3号住居址



1. H 4 号住居址



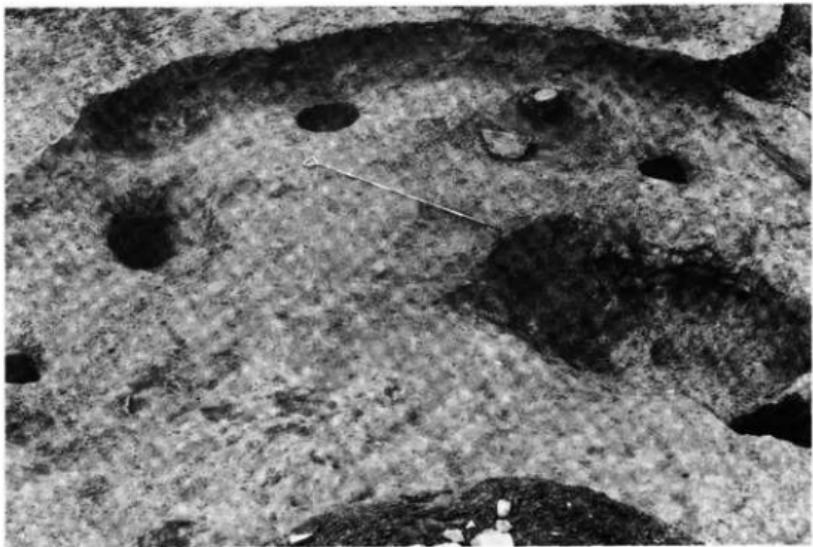
2. Y、5、6、7 号住居址



1. J8号住居址



2. J9号住居址



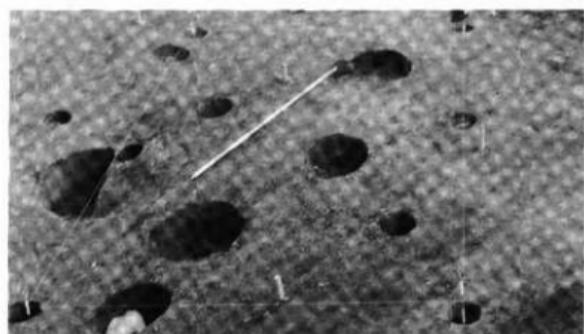
1. J10号住居址



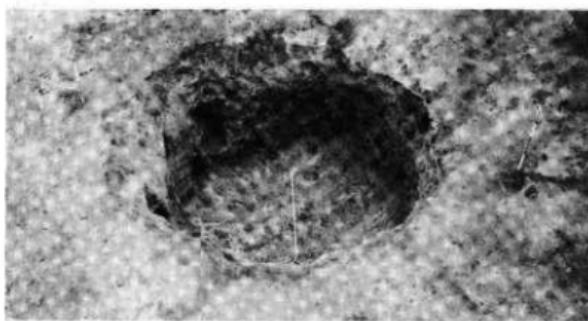
2. J11号住居址



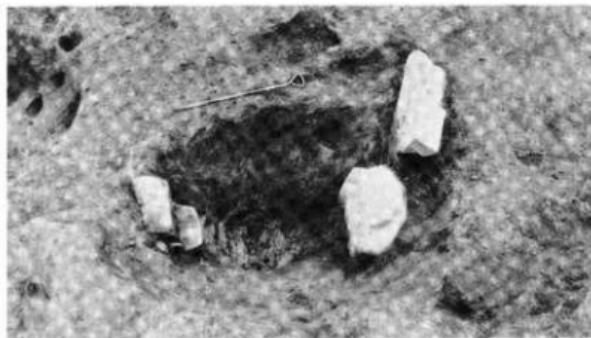
1. D 1号土塙



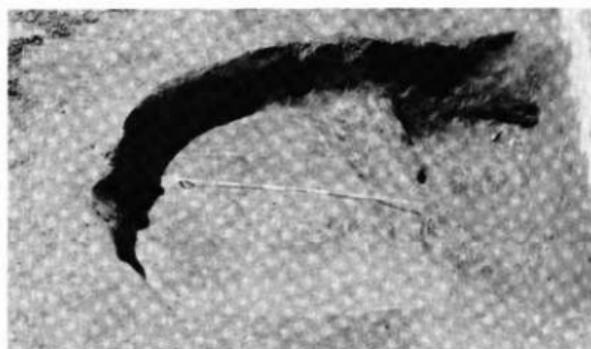
2. D 2号・3号・4号土塙(左端D 4号・その横D 3号・右奥D 2号)



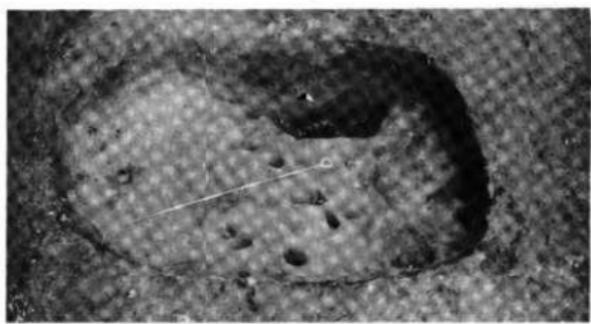
3. D 5号土塙



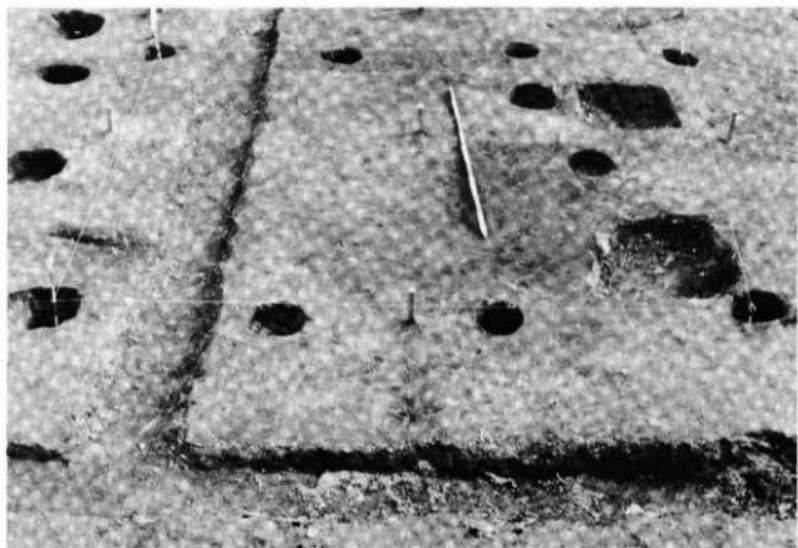
1. J 8 号住居址堅穴炉



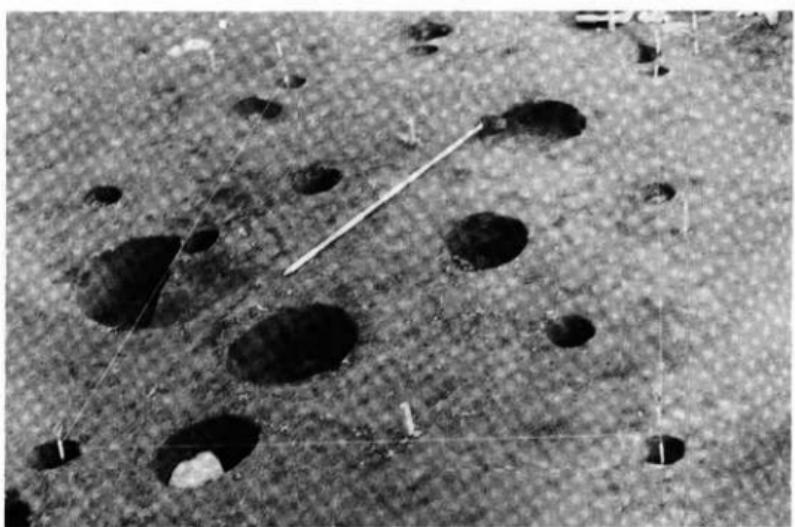
2. D 6 号土塙



3. D 7 号土塙



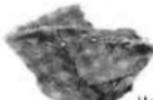
1. 第1掘立建物址



2. 第2掘立建物址



1. Y 1号住居址出土土器(1/4)



2. Y 3号住居址出土土器(1/4)



20-1

20-2

20-3

20-4



20-5

3. Y 7号住居址出土土器(1/4)



4. H 4号住居址出土土器及び同時代のグリッド・概出土器(1/4)



5. グリッド出土土器(1/4)



1. J 2 号住居址出土土器 ($\frac{1}{6}$)



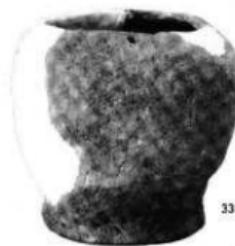
2. J 8 号住居址出土土器 ($\frac{1}{6}$)



1. J8号住居址出土土器(7、9.10は $\frac{1}{2}$ 、13~21は $\frac{1}{4}$)



1. J 8 号住居址埋甕出土状态



1. J 9 号住居址出土土器(1、4は半)



1. J 9号住居址石蓋付埋甌出土状態

図版 15(第1次)



36-1



36-3



36-4



36-2



39-1



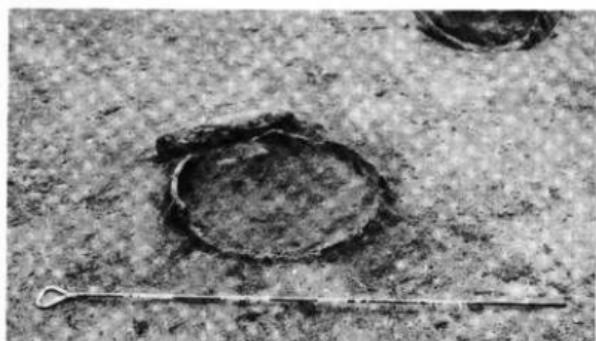
39-2

1. J10号住居址出土土器($\frac{1}{6}$ 、4は $\frac{1}{2}$)

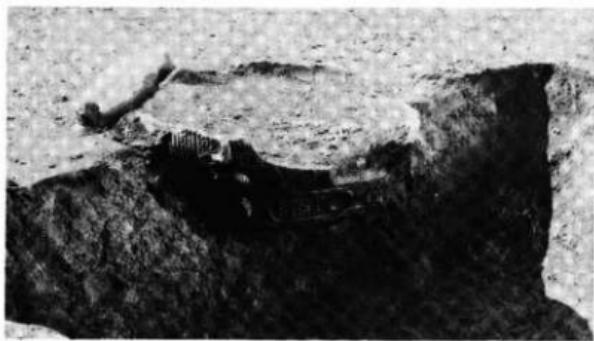
2. J11号住居址出土土器($\frac{1}{6}$)



1. J10号住居址埋葬出土状态



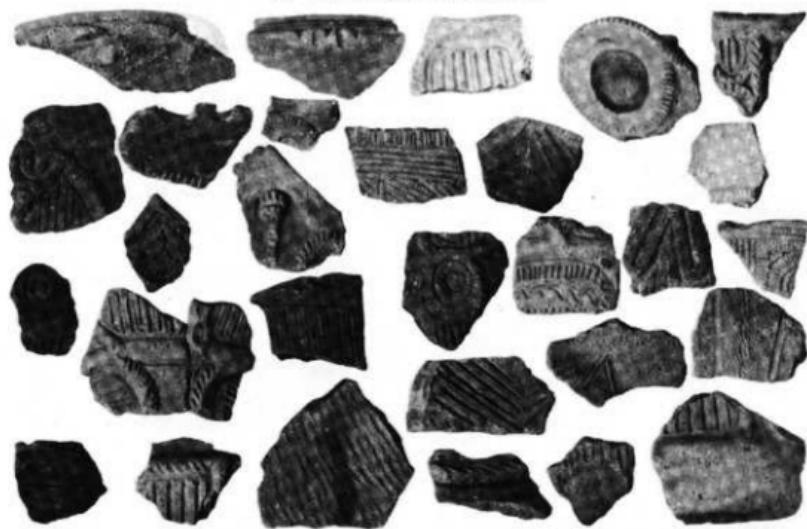
2. J11号住居址埋葬炉



3. 同上出土状态



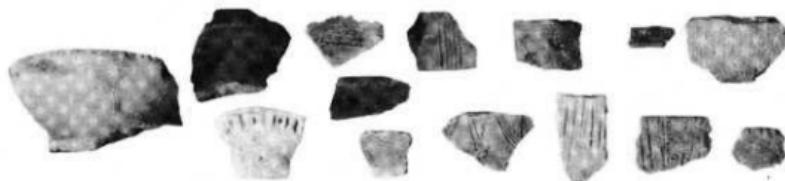
1. Y1号住居址出土土器片(1/2)



2. J2号住居址出土土器片(1/2)



3. Y3号住居址出土土器片(1/2)



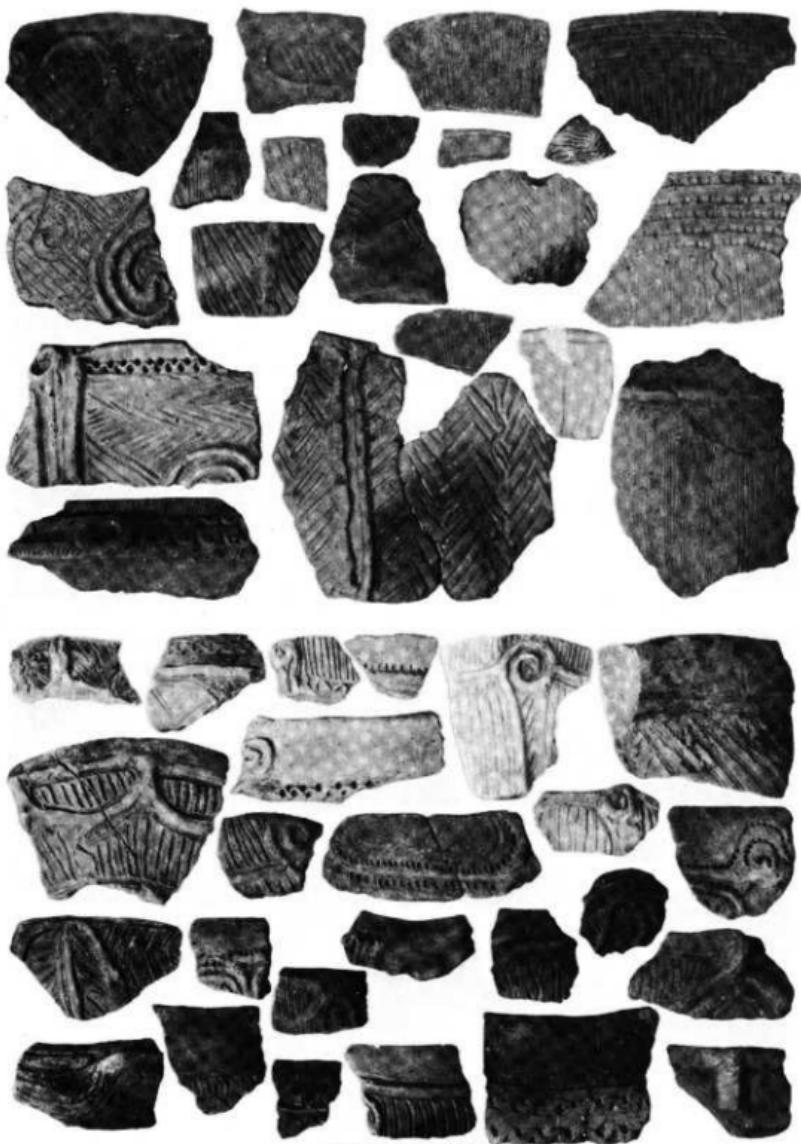
1. Y5号住居址出土土器片(1/2)



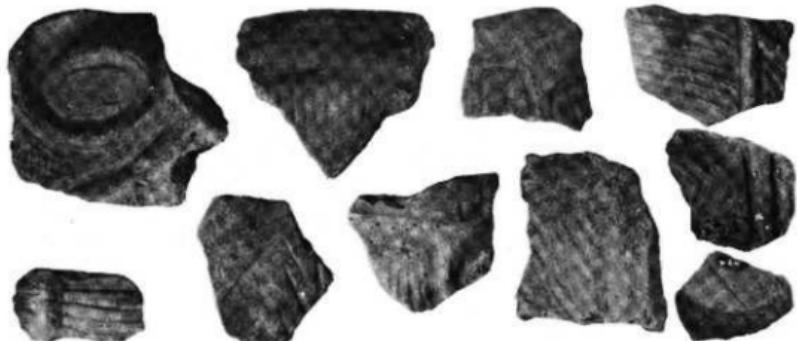
2. Y7号住居址出土土器片(1/2)



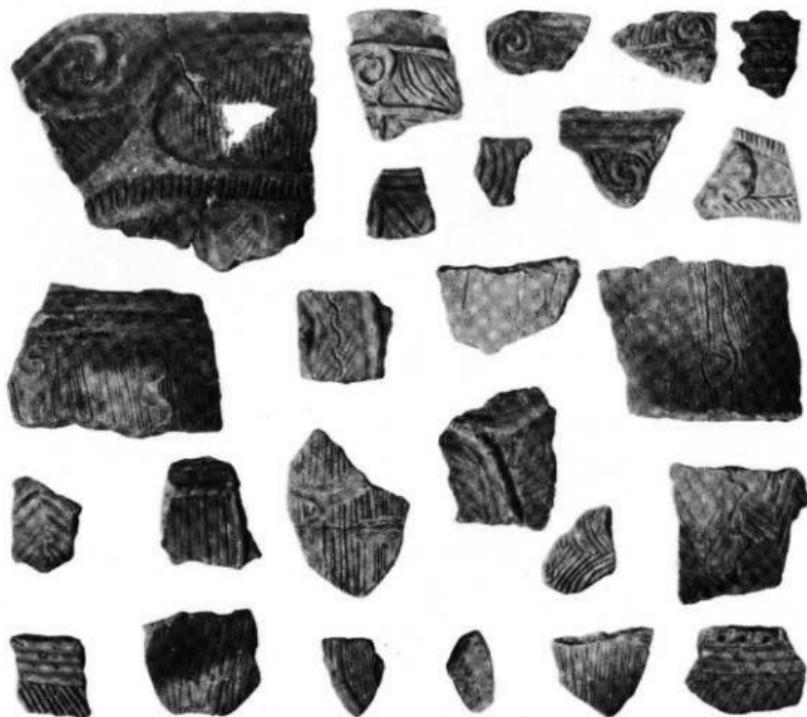
3. J8号住居址出土土器片(1/2)



1. J 8 号住居址出土土器片(一)



1. J 9号住居址出土土器片($\frac{1}{2}$)



2. J 10号住居址出土土器片($\frac{1}{2}$)



1. J11号住居址出土土器片(1)



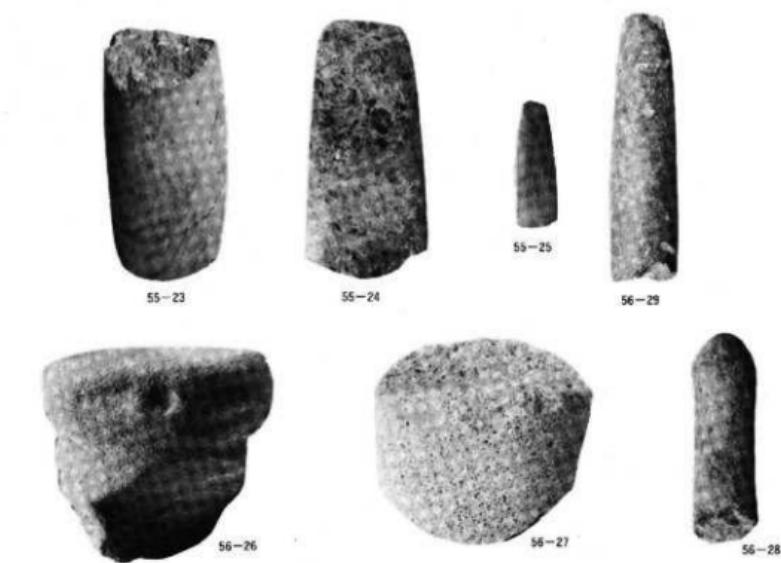
1. 表採・グリット出土土器片(縄文前期末～中期後半)



2. 表採・グリッド出土土器片(弥生時代後期)



54-1-21

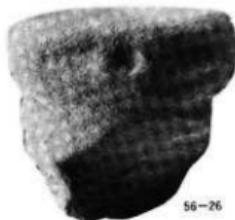


55-23

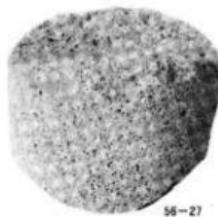
55-24

56-25

56-29



56-26



56-27



56-28

1. 削片石器・石鎌・磨石斧・手斧・石棒(1、26、27は $\frac{1}{2}$)

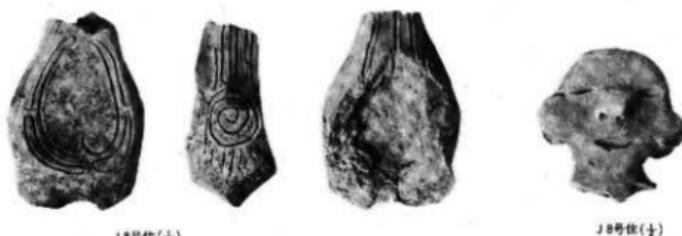


57-30(1/2)

58-31(+)

59-32(1/2)

1. 石皿、銅鉦、土器



J 8号住(1/2)

J 8号住(1/2)



表(1/2)

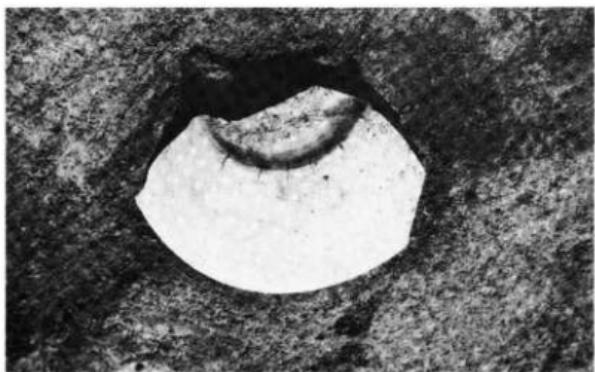
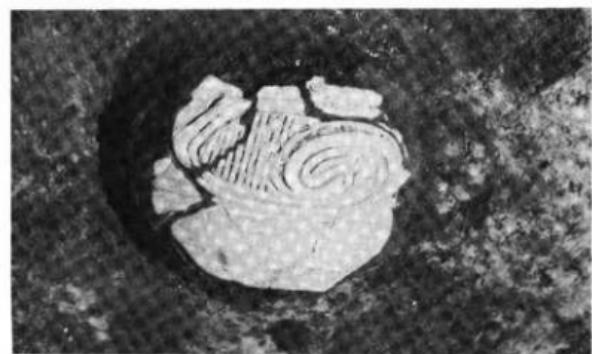
J 8号住

表

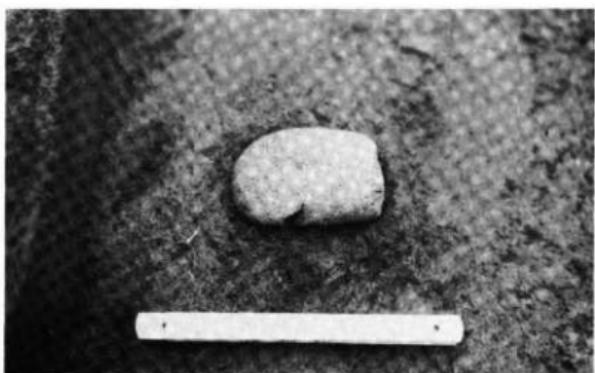
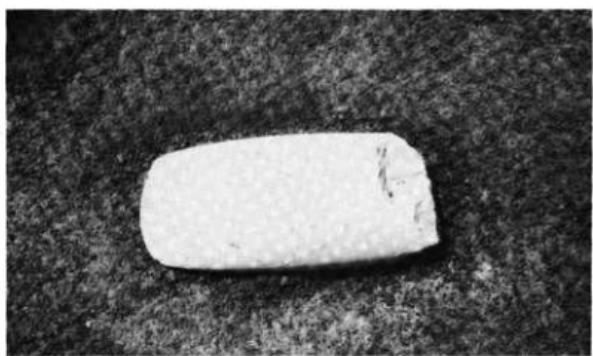
表

J 8号住

2. 出土土製品(1/2)



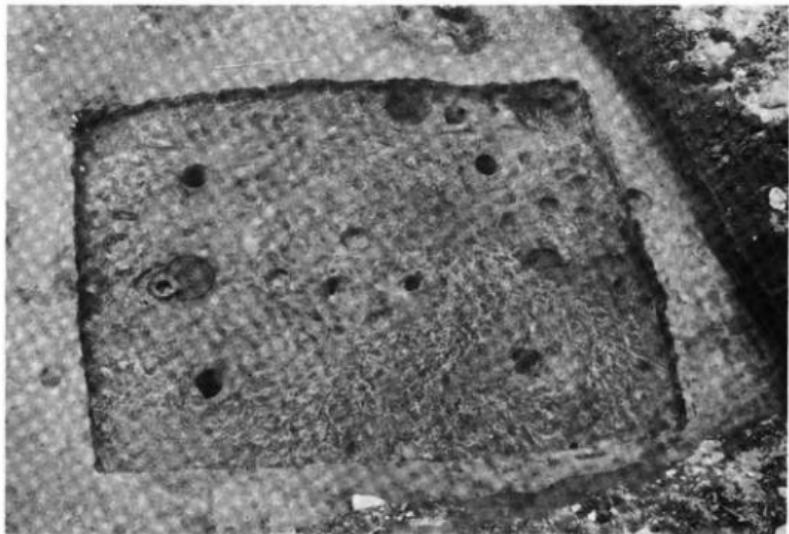
1. 遺物出土状態



1. 石器出土状態



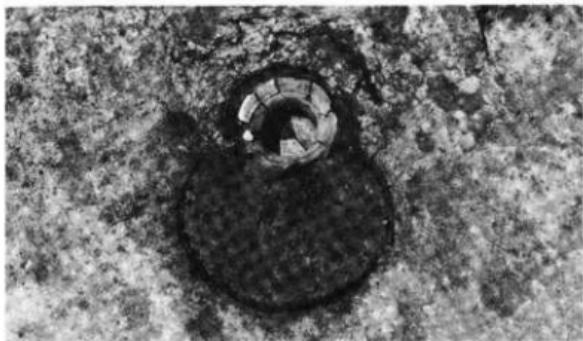
1. 発掘調査スナップ



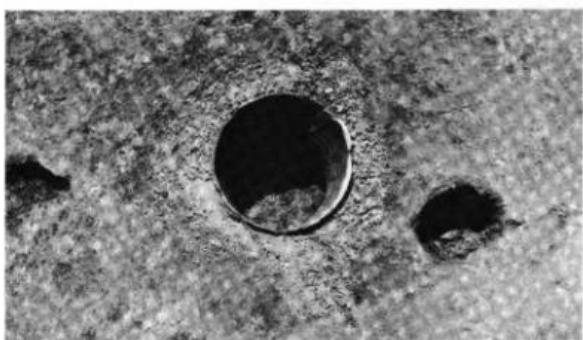
1. Y12号住居址



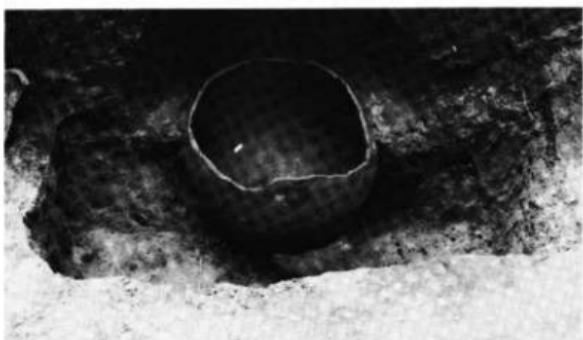
2. J13号住居址



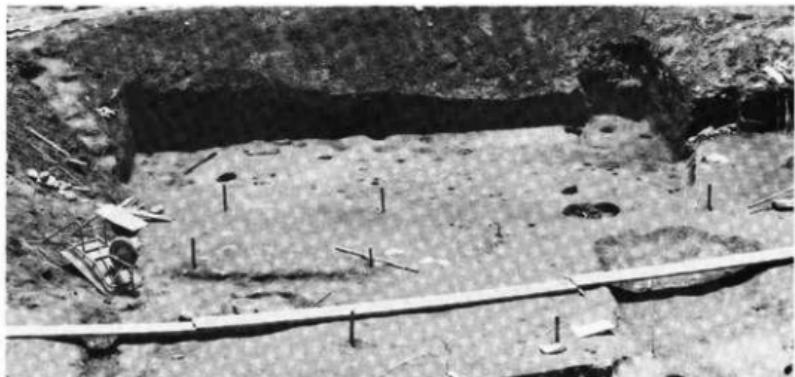
1. Y12号住居址埋甕炉



2. Y14号住居址埋甕炉



3. Y14号住居址埋甕炉



1. Y14号住居址



2. J15号住居址